

アメリカ合衆国の仏教の研究動向

木村 智

はじめに

今日、アメリカ合衆国の仏教徒数は人口の1パーセント未満とされるが^①、その数字以上に仏教は同国での存在感を強めてきた。「仏教徒」という自己同定こそしていないが、禅や瞑想などの実践をしたり趣味的に仏教書を読む人々は相当な数に上ると推測される。*Tricycle*などの仏教専門雑誌が購読者を増やし、また「サイバー・サンガ」と呼ばれるインターネット上の専用コミュニティでは仏教についての議論が日夜交わされている。仏教関係の書籍も、Shambhala Publications や Wisdom Publications などの出版社によって市場に供給されてきた。

「個人的実践」だけではない。社会参加仏教 (socially engaged Buddhism) と呼ばれる平和運動や環境運動の取り組みや、ダライ・ラマやティック・ナット・ハンなどの影響力のある指導者のメディアへの登場は、仏教が着実にアメリカの公共の領域に進出しつつあることを示している。また「マインドフルネス」は、教育や医療の現場に普及してきただけでなく、近年では Google や Facebook などの一流企業の研修で取り入れられたことでも話題になった。さらには、アジア系の仏教寺院も今日では着実にアメリカの町の風景の一部になりつつある。この光景は、19世紀以来の中国系・日系移民の存在と1965年の移民法以来の東南アジアからの移民の増加を反映している。

そして、仏教はアメリカの文化にも着実に影響を及ぼしてきたと言える。文学では1950年代のビート・ジェネレーション以来、仏教的モチーフが陰に陽に用いられてきた。ジャック・ケルアックの『ザ・ダルマ・バムズ』(1958年)は、仏法に魅せられた二人の若者がアメリカを彷徨う青春小説で、1960年代のカウンター・カルチャーに大きな影響を与えたとされる。映画でも、『クンドゥン』(1997年)や『セブン・イヤーズ・イン・チベット』(1997年)など、チベット仏教やダライ・ラマを扱った作品が話題を呼んだ。また、『スター・ウォーズ』にまで仏教的な思想やモチーフが散りばめられているという指摘があるくらいだから、アメリカ人が日常の中でいかに無意識に仏教に触れているかが分かる。

このような近年のアメリカの仏教の展開を受けて、それについての「研究」も多様な観点から行われてきた。本稿は、その研究動向の整理を目的としている。まず第1章では、マクロな視点から「アメリカの仏教」についての総論の動向を追う。具体的には、20世紀末に「アメリカの仏教」という研究フィールドが成立していく過程(1-1)および、アメリカの仏教の研究において発展してきた「類型」を整理する(1-2)。続く第2章では、ミクロな視点に切り替え、アメリカの仏教の諸側面が各々どのように研究されてきたかをまとめる。ただし言うまでもなくアメリカの仏教には様々な側面があり、それらの全ての研究動向を紹介することはできない。そこで同章では、特に研究の盛んな三つのテーマを取り上げ(アジア系の仏教集団(2-1)、仏教の表象(2-2)、マインドフルネ

ス (2・3)), それらの研究動向を整理したい。

本論に入る前に、二点断っておきたい。第一に、本稿で用いる「アメリカの仏教」という言葉は、英語で言う「Buddhism in America」の和訳であり、「American Buddhism (アメリカ仏教)」とは区別されるものである。(両方とも学術文献に見られる表現だが、管見の限りでは、近年は前者を用いる学者の方が多い。) ニュアンスとしては、前者が文字通り「アメリカに存在する仏教」という客観的な言葉であるのに対して、後者は「アメリカの仏教はアメリカ独特の形態を取っている (または取るべきだ)」という判断を前提としており、しばしば規範的な含みを持っている。本稿では、アメリカに存在する仏教の多様性をありのままに記述するためにも、「アメリカの仏教 (Buddhism in America)」という表現を用いたい^②。

第二に、本稿でサーベイの対象としたのは、アメリカの仏教に関する「学術的・客観的な」観点からの研究のみであり、「実践者による実践者向けの」書籍や雑誌 (*Tricycle* など) は扱っていない。(これらに学術性が全くない、と言い切ることはできないが。) ただし、アメリカの仏教研究者の中には「学者兼実践者 (scholar-practitioners)」(Charles Prebish の造語) と呼ばれる、研究者でありながら同時に信者・実践者でもある人々が少なくない。本稿では、学術的な研究である限り、こうした「学者兼実践者」の研究もサーベイの対象に入れている。(実のところ、「学者兼実践者」こそが、アメリカの仏教の研究の発展に大きく寄与してきたのである。)

1. 「アメリカの仏教」総論：マクロな視点から

はじめに紹介したいのが、「アメリカの仏教」という包括的な視座の研究の動向である。まず 1-1 では、「アメリカの仏教」という一つの研究フィールドが成立した経緯をまとめる。続く 1-2 では、この分野の研究者たちが「アメリカの仏教」に関してどのような「類型」を立てていったかを整理したい。

1-1. 「アメリカの仏教」という研究フィールドの成立

19 世紀以来アメリカには多様な仏教(徒)が存在してきたが、これらが「アメリカの仏教」という一つの大枠の中で研究されるようになったのは、実は比較的最近のことだ。本節では、このように「アメリカの仏教」というものが一つの研究フィールドとして成立していった過程を紹介したい。結論を先取りすると、「アメリカの仏教」という対象化の仕方は 1970 年代後半に始まり、その議論は 1990 年代に飛躍的な発展を迎えることとなる。

確かに、アメリカにおける個別の仏教集団や仏教徒に関する研究は、1970 年代以前にも存在していた。例えば Duncan Ryūken Williams が作成した、アメリカの仏教に関する全ての博士論文・修士論文・卒業論文のリストによれば、1930 年代から 1960 年代にかけて合計三つの論文が提出されている^③。(なお三つのタイトルはそれぞれ、“A Social Study of the Japanese Shinto and Buddhism in Los Angeles” (1937), “Japanese Buddhism in the United States” (1947), “The Shin Sect of Buddhism in America” (1951)であり、全て日系の仏教を対象としたものである。) しかしこれらの研究は、個別集団を文字通り「個別的に」扱ったものであり、著者たちは自分たちの研究が(今日で言うような)「アメリカの仏教」という大枠に属するものだとは考えもしなかつただろう。1970 年代前半まで、「アメリカの仏教」という対象化の仕方自体が存在していなかつたのである。

変化が見られたのは 1970 年代後半だった。Emma Layman の *Buddhism in America* (1976), Charles Prebish の *American Buddhism* (1979), Rick Fields の *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America* (1981) という三つの著作はとりわけ重要である⁽⁴⁾。これらの画期性は、それ以前の個別的なエスノグラフィーの段階を超えて、多様な仏教を「アメリカ (の) 仏教」という一つの大きな看板の下にまとめて叙述している点にある。例えば Fields の著作は、アジア系の仏教徒 (19 世紀にカリフォルニアに到着した中国系移民から始まり、ダライ・ラマの登場に至るまで) と非アジア系のアメリカ人 (仏教に感化された 19 世紀の超絶主義者たちから始まり、20 世紀のビート・ジェネレーションや禅ブームに至るまで) の両方、つまりアメリカに存在してきたあらゆる仏教を網羅しようとした野心的な試みだった。このような包括的な「アメリカの仏教」という対象設定の仕方は、1980 年代以降ますます普及していくことになる。

そして 1990 年代、アメリカの仏教に関する研究が飛躍的な発展を迎える。まずこの時期に、Joseph Tamney, Charles Prebish, Richard Hughes Seager の三人各々がアメリカの仏教に関する単著を書いている⁽⁵⁾。ここで彼らの専門分野が社会学 (Tamney), 仏教学 (Prebish), アメリカ宗教史 (Seager) であることを踏まえるならば、この三つの単著の出現は、多様な分野の学者たちが各々の関心や方法論に基づいて「アメリカの仏教」という研究対象に向き合い始めたことを示していると言えるだろう。

また 1990 年代のもう一つの進展は、アメリカの仏教に関する連続講演や学術会議が各地で開催されるようになったことである。まず 1994 年にはパークレーの Institute of Buddhist Studies が “Buddhisms in America: An Expanding Frontier” という題の連続講演を後援している。この十二週間に亘る講演では、ケネス・タナカのオーガナイズの下、多数の学者が研究の成果を披露した⁽⁶⁾。また、1997 年にはハーバード大学神学大学院にて “Buddhism in America: Methods and Findings in Recent Scholarship” と題する学術会議が開かれ、様々な学問的背景を持った学者たちが最新の研究を発表し合い、さらにはアメリカの仏教の研究における「方法論上の」問題も話し合われた⁽⁷⁾。これら二つのイベントは、単にアメリカの仏教という研究対象の認知度が上がっていることだけでなく、「それを研究する学者間の交流」が盛んになってきたことを示している。また、これらの催しには、多様な学問分野 (仏教学, アメリカ宗教史学, 人類学, 社会学など) に属する学者たちが参加している点も重要である。多様な学者が多様な観点からアメリカの仏教を研究し、その成果を互いに共有するということは、「アメリカの仏教」という土俵が誕生する以前にはあり得なかったことだろう。なお、これら二つの催しの成果は、のちにそれぞれ論集として出版されており⁽⁸⁾、今日に至るまで、アメリカの仏教の研究における必読書となっている。

以上のような、1990 年代の研究の急成長を明快に物語るのが、Thomas Tweed の以下の回想である。「私が [1992 年に] *The American Encounter with Buddhism* を書いた時、このトピック [アメリカの仏教] についての研究はほとんど存在しなかった。[……] 学会の場で同僚に、自分はアメリカの仏教を研究していると打ち明ければ、混乱して目を凝らされたものだった。それは、とても一つの研究分野ではなかったのだ」⁽⁹⁾。しかし、1990 年代を通じてこの状況は大きく改善され、数十人もの学者・大学院生がアメリカの仏教を専門とするようになったと Tweed は言う。

以上、「アメリカの仏教」という研究フィールドの成立過程を追ってきた。「アメリカの仏教」という対象化の仕方は 1970 年代後半に始まり、その研究は 1990 年代に飛躍的に発達したと言えるだ

ろう。

ただし、この研究フィールドにはまだ不十分な側面もあるということを指摘しておきたい。例えば、2017年現在、「アメリカの仏教」にもっぱらフォーカスした学術的な雑誌や学会が存在しない。（もちろん、「仏教一般」に関する学術雑誌・学会はある。）そのため現段階では、アメリカの仏教の研究者たちは、アメリカ宗教学会（AAR）内部の下位群である Asian North American Religion, Culture, and Society Group (ANARCS)などで活動しているようだ⁽¹⁰⁾。今後、組織的な面でアメリカの仏教の研究がどのように進むのかにも注目したい。

1-2. 類型

前節では「アメリカの仏教」が対象化されていく過程を概観した。ところで、その過程で研究者たちが必要としたのは、あまりに多様なアメリカの仏教（徒）を整理するための「類型」であった。もちろん、通常の仏教の類型（「テーラヴァーダ仏教」、「大乘仏教」などの大きな区分や、「浄土真宗」、「臨済宗」などの宗派による区分）が用いられることもあるが、これらはどちらかと言えば脇役で、せいぜい下位区分として使われるだけである。むしろアメリカの仏教のユニークな事情を反映して、独特な類型が生み出されてきた。本節では、その主たる類型の幾つかを紹介したい。

アメリカの仏教徒の類型として最もシンプルかつ古典的なものは、エスニシティに基づく二類型、すなわち「アジア系移民」と「白人」という分類である。しばしば「two Buddhisms」論とも呼ばれるこの二分法は、単に肌の色の違いを基準としたものではなく、むしろ仏教がその信者たちにとって果たす「役割」の違いを反映したものである。すなわち、アジア系の移民集団にとっては、仏教は「伝統宗教」であり、その果たす役割は往往にして社会的・文化的なものである。移民系の寺院が、宗教的な役割だけでなく、そのコミュニティの集会場として機能しているケースも多い。対照的に、白人にとって仏教は（キリスト教という伝統に対する）「オルターナティブ」であるがゆえ、彼らの入信や実践は個人的かつ自発的なものとなる。禅やマインドフルネスといった実践の流行からも分かるように、多くの白人仏教徒にとって、仏教は社会的繋がりを提供するものというよりはむしろ、個人的でスピリチュアルなニーズを満たしてくれるものなのである⁽¹¹⁾。

このエスニシティに基づく二分法を踏まえつつ、より洗練された類型がやがて登場してくる。その中でも特に有名な二つの類型を以下に紹介したい。

Jan Nattier は、仏教がアメリカに入ってくる際の「移動の仕方」に着目し、「輸入 (import)」型、「輸出 (export)」型、「手荷物 (baggage)」型という三類型を立てる⁽¹²⁾。「輸入」型は、経済的・時間的余裕を持ち合わせた「エリート」のアメリカ人が、自発的にアジアから仏教を取り寄せるというパターンであり、これらは禅などの瞑想実践に代表される。Nattier はこれを「エリート仏教」とも言い換えている。続いて「輸出」型は、「輸入」型とは対照的に、アジアの方からアメリカへ仏教を「売り出す」タイプで、その好例が創価学会だ。このタイプは、単にアジアの仏教徒が渡米するだけでなく、自発的で活発な伝道を伴うのが特徴である。そのため Nattier はこのタイプを「福音主義仏教」とも言い換えている。そして最後に「手荷物」型だが、これはアジアからの移民が（宗教的な理由とは無関係に）アメリカに来る際に、自分たちと一緒に持ち込むタイプの仏教である。これは移民集団のエスニック・アイデンティティーと密接に関わるものであり、そのため Nattier はこれを「エスニック仏教」とも言い換えている。以上の Nattier の三類型は仏教の「移動」のバ

ターンに着目したものであり、仏教が「外来のもの」であるアメリカならではの類型だと言えるだろう。

続いて取り上げるのは Richard Hughes Seager による三類型だ⁽¹³⁾。第一のグループは「改宗」仏教徒で、これは 20 世紀中葉以降に仏教を信奉するようになった、アメリカ生まれの人々のことだ。このグループに含まれるのは白人とは限らない。仏教的な出自を持たずに自らの意思で仏教に改宗した者は、エスニシティに関係なく皆このグループに含まれる。第二のグループは、移民系ないしエスニック仏教徒である。これは比較的最近の移民たち、すなわち 1965 年の移民法以降にアジアから渡米した仏教徒たちだ。そして第三のグループは、より古くから（既に 4～5 世代に亘り）アメリカにいる中国系や日系の仏教徒たちである。彼らは、20 世紀後半のアメリカの仏教状況の中で見れば、「改宗」もしていないが「移民」でもないという人々であり、第一・第二のグループとは区別される。

Seager のこの類型の重要性は、Nattier が単に「手荷物」型と一括りにしたアジア系移民を、「時代」に基づいて細分化した点にある。「移民」と一口に言っても、実際には 19 世紀以来の中国系・日系の仏教徒と 1960 年代以降渡米した東南アジア系の仏教徒では、組織形態や教義はもちろん、経験したアメリカ化の度合いも大幅に異なる。Seager の類型はこのような移民の多様性を理解する上で役に立つと言えるだろう。

以上、アメリカの仏教の類型を見てきた。エスニシティによる二分法（「two Buddhisms」）を基本としつつ、様々な研究者が独自の類型を唱えてきたと言えよう。（管見の限りでは、2017 年現在、どれか一つの類型が他を淘汰した様子はない。）そして今後もアメリカの仏教の状況の変化に応じて、新しい類型が生まれ続けるだろう。もちろん絶対的な類型など存在せず、研究者は自らの目的に合致する類型を絶えず選択・創造していくことが求められよう。

2. テーマ別研究：ミクロな視点から

前章では「アメリカの仏教」というマクロな視点の研究のサーベイを行ったが、本章ではよりミクロな研究のサーベイをする。ただしアメリカの仏教の持つ諸側面の全てをこの小論で扱うことはできない。そこで本章では、その中から三つのテーマ（アジア系の仏教集団(2-1)、仏教の表象(2-2)、マインドフルネス(2-3))を選び、それらについての先行研究の動向をまとめた。

2-1. アジア系の仏教集団

アジア系の個別集団についての研究は、「アメリカの仏教」という「大枠」が成立する以前から存在していた。しかし、先にも触れた Williams の博士論文・修士論文・卒業論文のリストからも分かる通り、1960 年代以前の研究は極めて散発的なものだった。

これに対し、「アメリカの仏教」という一つの枠組みが成立した 20 世紀末以降は、個別集団についての研究の質・量ともに上がっていく。個別集団が文字通り「個別的に」研究されていた時代は終わり、「アメリカの仏教」という大枠の中での「比較」や「関連付け」が盛んに行われるようになっていく。そのような洗練された研究が生まれるのは、特に 1990 年代以降のことだった。Thomas Tweed は、1990 年代を通して、社会学者や人類学者たちがアメリカの仏教集団を研究する「モデル」を作り出していったと言う⁽¹⁴⁾。

そのような新しい分析モデルの例として、Paul David Numrich の「平行 (parallelism)」論が挙げられよう。彼は、*Old Wisdom in the New World: Americanization in Two Immigrant Theravada Buddhist Temples* (1996)の中で、移民系のテーラヴァーダ仏教の寺院を分析し、同一の寺院内部に互いに交わることのない二つのグループが存在していることに気が付いた。一つは、「アジア系移民」で、彼らの世界観や儀礼実践は伝統的なテーラヴァーダ仏教のそれである。そしてもう一つは「(非アジア系) アメリカ人改宗者」だ。彼らは自らの意志でテーラヴァーダ仏教に改宗した人々で、哲学や瞑想などに関心がある⁽¹⁵⁾。これら二つのグループは仏教に求めるものが互いに異なるため、同じ寺院を使用しつつも、その活動は原則として別々である。両者が同時に寺院にいるときでさえ、一つの部屋ではアジア系移民向けの儀礼が行われ、もう一つの部屋ではアメリカ人改宗者が仏教哲学の議論をしている、といった様子だという⁽¹⁶⁾。これが Numrich が「平行 (parallelism)」と名付ける現象である。

Numrich のこの分析モデルは、アメリカの仏教を研究する他の学者たちにも広く受け入れられていく。例えば、日系の曹洞宗寺院の現状を研究する学者が Numrich のこの「平行」論を借用しているが⁽¹⁷⁾、これは Numrich の分析モデルがテーラヴァーダ仏教の寺院という具体的な研究対象に留まらず、より一般的な理論として普及しつつあることを示している。このように、異なる仏教集団を研究する学者が互いに参照し合ったり、アメリカの仏教に関する一般理論を構築することは、「アメリカの仏教」という大枠の成立以前にはあり得なかったことであり、研究の発展を物語っていると言えるだろう。言い換えれば、20 世紀末の「アメリカの仏教」というマクロな視座の成立が、個々の集団についてのミクロな研究をもより生産的なものにしたということである。

また近年の個別集団研究の特徴として、「比較」という視点の導入も挙げられるだろう。かつては散り散りに研究されていた諸集団が、今や「アメリカの仏教」という同じ傘の下の他の集団と比較されることで、よりよく理解されるようになっていく。例えば、Asai and Williams (1999)の主たる研究対象は三つの日系の曹洞宗寺院 (ホノルルの正法寺、ロサンゼルス市の禅宗寺、サンフランシスコの桑港寺) であるが、彼らはこれらを単独で分析するのではなく、白人系の禅センターとの比較によってその特徴を炙り出す。両組織の年間収支や建物の配置を比較するというユニークな手法で彼らが辿り着いた結論は、日系の曹洞宗寺院は先祖供養や文化的活動に力を入れる一方であまり座禅はしないという、「座禅なき禅 (Zazenless-Zen)」(Ian Reader の造語) になっているということである⁽¹⁸⁾。比較を取り入れたこのような研究も、「アメリカの仏教」という大枠の成立以前にはありえなかった、生産的なものである。

個別集団研究における「着眼点」の動向についても一言触れておこう。圧倒的に多いのは、「その集団がアメリカで経た変容」、「アメリカ化 (Americanization)」に着目した研究である。その好例は、学界での評価も高く邦訳もされている、フィリップ・ハモンド、デヴィッド・マハチェクの『アメリカの創価学会——適応と転換をめぐる社会学的考察』(原著 1999 年、邦訳 2000 年) だ。副題の通り、焦点が当てられているのは、アメリカの創価学会の「適応と転換」という側面である。同著の内容をかいつまんで紹介しよう。まず文化的な面では、アメリカの創価学会で当初行われていた日本風の習慣 (日本語での会合、屋内では靴を脱ぐこと、御本尊の前で床に直接座ること、男女が分かれて座ることなど) は 1960~70 年代にかけて後退し、英語による会合が増え、会員たちは靴のまま会館に入ったり、床ではなく椅子に座るようになっていった⁽¹⁹⁾。さらにイデオロギー的な

面でもアメリカの創価学会には変化が見られた。その好例が、アメリカの愛国主義の受け入れだ。1976年には、アメリカ建国200年を祝う祭典と連携する形でコンベンションを開催しており、幹部たちは仏教の世界平和の実現と（アメリカ的な）民主主義の理想との密接な関係を強調するスピーチや文章を発表している。そしてここにおいて創価学会は、「アメリカの《市民宗教》を積極的に宣揚し」ている、とハモンドとマハチェクは指摘する⁽²⁰⁾。また、組織的な面でもアメリカの創価学会は変容してきた。当初は、日本からの伝統を踏襲した、家父長制的な組織形態や非民主的な幹部登用方法が取られていた。しかしアメリカ人のメンバーからの批判を受けて、1970年代にはよりアメリカらしい会衆的なモデルが採用され、全国本部に代わって地域の会館が発言力や自治を獲得した。また男女平等の要求に応じて、幹部役職に就く女性の数も増えていった⁽²¹⁾。このようにハモンドとマハチェクは、創価学会がアメリカという環境に「適応」し「転換」していく様子を社会学的に描き出している。

ハモンドとマハチェクのこの研究は、アメリカの仏教の個別集団研究としては典型的なものと言えるだろう。アメリカに存在する仏教集団は、「（輸入）型であれ「輸出」型であれ「手荷物」型であれ）いずれも「アジアからアメリカへ」移動した事例であり、その「移動」に伴う「変容」が、必然的に研究者たちの関心を集めてきた。またこの変容の分析にあたり、「アメリカ化（Americanization）」という言葉が用いられる場合も多い。先述の Numrich は「アメリカ化」を「外来の宗教伝統のアメリカの文脈への適応」と定義し⁽²²⁾、それがアメリカのテラヴァーダ仏教コミュニティにも見られると言う。（例えば、英語の使用の増加、一般信徒の自主的な参与や彼らの地位の向上、僧侶の権限を制限しようとする動きなど。）また Seager はアメリカの仏教集団同士の超宗派的な交流・対話や、キリスト教などの宗教間対話をリサーチしているが⁽²³⁾、これらもやはり「アメリカ的な」現象と言えよう。アメリカに移ってきた仏教徒たちが経験する宗教・宗派の多様性は、アジアのそれとは桁違いなものであり、彼らはこの問題への対応を迫られることになるのである⁽²⁴⁾。

2-2. 仏教の表象

仏教は19世紀以来、アメリカ人の関心に合わせて様々な仕方で表象されてきた。近年では、そのような仏教の表象に関する歴史研究が盛んに行われている。本節ではこの研究動向を紹介する。以下に見ていくように、この類の研究には、主に二種類の担い手が存在してきたと言えよう。

第一の担い手は、エドワード・サイードのオリエンタリズム論に影響を受けた仏教学者たちである。確かにサイードの『オリエンタリズム』（1978年）は直接的には仏教圏を論じていないが、「西洋人が東洋をどのように解釈（ないし曲解）してきたか」を分析する視点を仏教学者たちに提供したと言えるだろう⁽²⁵⁾。このような視点からアメリカ人の仏教理解を分析した事例として、以下に二つの研究を紹介しよう。

Ellen Goldberg (1999)は、サイードのオリエンタリズム論の中から、オリエントの「神秘化」、「本質化」、「テキスト化」、「誤った地政学的カテゴリーの分極化」、「周縁化」、「一般化」、「女性化」といったテーマを引き出し、これらを用いてアメリカにおける仏教像を分析する⁽²⁶⁾。ただしその際 Goldberg は、アメリカ人による仏教の曲解だけでなく、アメリカに仏教を伝えた東洋人たち自身による仏教像の操作にも着目する。例えば1950年代のビート・ジェネレーションなどに大きな影響

を与えたとされる鈴木大拙は、儀礼や教義よりも純粹な直接経験を重んじる点で仏教を「神秘化」しており、また靈的な「東洋」と物質的な「西洋」の対比にこだわるという地政学的な「分極化」をしている、と Goldberg は言う。「仏教をエキゾチックで超越的で本質的に神秘的なものとして描くことで、仏教は誤った特徴づけをされたのである。そしてこの虚偽の陳述はいまだに北米の禅仏教の様式の中に残っている」⁽²⁷⁾。

David McMahan (2004)は、今日まで根強い「仏教は科学的だ」という言説についての系譜学的な分析を試みる⁽²⁸⁾。彼は、この近代的言説の起源が、19世紀から20世紀にかけての一部の仏教徒・仏教共感者にあると考え、具体的には、二人の西洋人 (Paul Carus と Henry Steel Olcott) と、一人の東洋人 (Anagarika Dharmapala) を取り上げる。そして McMahan は、これらの西洋人と東洋人が互いに異なった関心の下に、この共通の科学的仏教言説を構築していった過程を描き出す。この研究ではサイドへの直接的な言及はないが、Goldberg の研究と同様に、アメリカ史の中で行われた仏教像の操作の解明を試みた優れた研究だと言える。

アメリカにおける仏教の表象研究の第二の担い手は、アメリカ宗教史を専門とする学者たちである。大きな画期となった著作は、Thomas Tweed の *The American Encounter with Buddhism 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent* (1992)である。同著は数多の一次文献に基づき、ヴィクトリア期のアメリカ人が仏教をどのように捉えていたかを分析したもので、学界でも高い評価を受けてきた。Tweedによれば、この時代のアメリカ人 (主に白人の知識人層) には「秘教主義者」、「合理主義者」、「ロマン主義者」という三種類の仏教共感者がおり、中には C. T. Strauss や H. S. Olcott のように仏教徒になる者までいた。しかし結局のところ、ヴィクトリア期の価値観 (とりわけ楽観主義と行動主義) を身につけた当時の多数派のアメリカ人にとっては、(悲観主義的で受動的に見える) 仏教は受け入れがたいものだった、というのが Tweed の見解である。

Tweed のこの著作以降、アメリカにおける仏教像に関する同様の歴史研究が次々に生まれた⁽²⁹⁾。Arthur Versluis (1993)は、19世紀のニューイングランドの超絶主義者たち (R. W. Emerson, H. D. Thoreau など) がアジアの宗教に対してどのような反応を示したかを研究した。Martin Verhoeven (1999)と Harold Henderson (1993)はヴィクトリア期の仏教共感者である P. Carus について、また Stephen Prothero (1996)は神智学協会の創始者 H. S. Olcott についての歴史研究を行った。それから 1893年のシカゴでの万国宗教会議に関する Richard Hughes Seager (1995)の研究は、仏教に焦点を当てたものではないが、アメリカ史における仏教表象を知る上でやはり重要な文献である⁽³⁰⁾。

以上本節では、近年盛んな仏教の表象研究の動向を見てきた。1990年代以降、仏教学とアメリカ宗教史という二つの分野でこの研究が行われてきた、とまとめることができるだろう。

2-3. マインドフルネス

本節では、アメリカの仏教の一側面である「マインドフルネス」と呼ばれる瞑想法についての研究動向を紹介する。マインドフルネスはそもそもは東南アジアのテーラヴァーダ仏教に由来するが、近年のアメリカではストレスの軽減や集中力の向上などを目的に、医療、福祉、スポーツ、教育などの現場に普及しつつある。その過程で仏教という起源自体が忘れられつつあることも確かだ。例えば、「マインドフルネスに基づくストレス軽減 (Mindfulness-Based Stress Reduction)」と呼ばれる八週間のトレーニング方法を考案し、医療実践としてマインドフルネスを発達させた Jon

Kabat-Zinn は、仏教色を薄め、マインドフルネスを「意図的に、今この瞬間において、判断を避けて、注意を払うこと」と定義している⁽³¹⁾。このように「世俗化」（あるいは Jessie Sun の言葉を借りれば「脱仏教化 (de-Buddhication)」⁽³²⁾)を経たマインドフルネスの実践や出版物は 1990 年代後半から急増し、2000 年代以降も増加の一途を辿っている⁽³³⁾。最近では、*Time* 誌で特集が組まれたり、欧米の一流企業の研修に取り入れられたことでも話題になった。

このようなマインドフルネスの実践の増加に伴い、それに関する研究も盛んに行われてきた。その研究において活発なのは、仏教学者や宗教学者というよりむしろ、心理学・医学・自然科学系の学者たちである。（この傾向自体が、マインドフルネスの「世俗化」、「脱仏教化」を反映していると言えよう。）これらの科学的な研究の多くは、実践的な関心に基づいており、マインドフルネスの効用性を分析しそれを向上させることに主眼を置いている。例えば、マインドフルネスが摂食障害やストレスといった疾患にどのように働きかけるのか、またマインドフルネスは集中力や記憶力といったパフォーマンスの改善や免疫機能の向上とどのように関連しているのか、などを分析した研究がある⁽³⁴⁾。つまりこれらの研究・実験は、マインドフルネスを積極的に洗練・推進しようとする動きだと言ってよいだろう。また、近年では大衆向けにもマインドフルネスを紹介・推奨する雑誌や本が多数書かれている⁽³⁵⁾。

しかし、心理学・医学・自然科学の専門家の中にも、マインドフルネスに批判的な立場を取る者もいる。例えば Geoff Dawson and Liz Turnbull (2006) は、人間はマインドフルネスを通して「自然に」倫理的になったり平穏になったりするわけではなく、むしろ状況次第では逆に自己中心的になる場合もあると主張し、重要なのはマインドフルネスが教えられる文化的・社会的文脈だと言う⁽³⁶⁾。また Miles Neale (2011) も、知恵や倫理を欠いた瞑想の実践がもたらすのは一時的な平穏にすぎず、瞑想を終えて「ヨーガのマットを折りたたんだり、『オーム』を唱え終える」頃には、元の苦痛が戻って来るだろうと述べている⁽³⁷⁾。これらの論者は、今日のマインドフルネス実践が個人主義的で功利主義的なものになっているとして警鐘を鳴らしているのである。

続いて、仏教学者によるマインドフルネス研究を見てみよう。先述の通りマインドフルネス研究の担い手には、実践的な関心を持った心理学者や科学者が多いが、仏教学の観点からの研究も一定数存在する。好例が Rupert Gethin (2011) による、「マインドフルネス」概念の系譜学的分析だ。Gethin は、イギリスの東洋学者 Rhys Davids (1843-1922) がパーリ語の仏典中の“sati”という単語を初めて“mindfulness”と英訳した経緯にまで遡り、テーラヴァーダ仏教における元々の「マインドフルネス」が、今日に至るまでどのように変容してきたかを追う。Gethin によれば、近年のマインドフルネスの推進者たち (Jack Kornfield, Joseph Goldstein, Jon Kabat-Zinn など) はその実践において「判断を避ける (non-judgmental)」ということばかりを強調するが、これは元来のテーラヴァーダ仏教での“sati”概念のごく一要素に過ぎない。従って、このような現代のマインドフルネス理解は、伝統仏教の観点からすれば、「マインドフルネスのミニマリストな定義」に基づいたものだとして Gethin は結論づけている⁽³⁸⁾。（ただし Gethin 自身は、だからと言って現代のマインドフルネスが無効だとは言わない⁽³⁹⁾。他方、仏教学者の中には、George Dreyfus (2011) や Ron Purser and David Roy (2013) のように、現代のマインドフルネスにはっきりと疑問を呈する者もいる⁽⁴⁰⁾。）

以上、マインドフルネスの研究動向として、心理学・医学・自然科学の分野と、仏教学の分野との研究を見てきた。彼らの研究は、目的も手法も大きく異なっていると言えるだろう。しかし、2010

年代の新たな動向として、両者の間に学問的な交流が生まれつつある、ということも付け加えておきたい。その象徴的な出来事は、仏教研究の国際的学術雑誌 *Contemporary Buddhism* が 2011 年にマインドフルネス特集を組み、仏教学者だけでなく心理学・医学・自然科学系の研究者による計 17 本の論文を収録したことである。その上、この特集号のゲスト編集者の任を託されたのは、仏教学ではなく医学を専門とする J. Mark G. Williams と Jon Kabat-Zinn だった。二人がこの特集号の序論で「仏教を専門的に扱った学術雑誌が、このような学際的な対話を主催しようとしたこと自体が、最近まで大きく分断されていた学問・研究の分野の間の障壁が解消しつつあることを示している」⁽⁴¹⁾と述べているように、マインドフルネス研究は現在新たな展開を迎えていると言えるだろう。

おわりに

本稿ではアメリカ合衆国の仏教についての研究動向をサーベイしてきた。第 1 章ではマクロな視点から「アメリカの仏教」についての総論の動向を追った。1-1 では、「アメリカの仏教」という研究フィールドが 1970 年代から 1990 年代にかけて成立していった経緯をまとめ、続く 1-2 ではアメリカの仏教の研究史において発展してきた「類型」を幾つか紹介した。そして第 2 章では、ミクロな視点から、アメリカの仏教の諸側面に関する研究の動向を整理した。具体的には、アジア系の仏教集団 (2-1)、仏教の表象 (2-2)、マインドフルネス (2-3) という三つのテーマを取り上げ、それらの研究史をまとめた。

今後のアメリカの仏教の研究は、多分にアメリカの仏教そのものの動向次第であろう。アメリカでは過去数十年間で仏教徒の数も増え、仏教の社会的認知度も上がってきた。そしてこれから数十年の間に仏教はユダヤ教を追い抜いて、キリスト教に次ぐアメリカで二番目に大きな宗教になるだろうというケネス・タナカの推測⁽⁴²⁾が正しければ、なおさら仏教を研究する必然性は上がるだろう。

しかし最後に、本稿でその妥当性を自明視してきた「アメリカの仏教」という研究領域さえも、今後批判的検討の余地があるということも付け加えておきたい。確かに、本稿で指摘した通り「アメリカの仏教」という一つの「土俵」が成立したことで研究の量・質は飛躍的に向上した。しかし、「アメリカ」という国民国家単位に固執して研究することは、昨今の歴史学の動向にそぐわない。近年のトランスナショナル・ヒストリーやグローバル・ヒストリーの視点を導入して、世界のより広範な諸地域間のダイナミックな連関を描き出すような歴史叙述が必要になっていくだろう。さらには、「仏教」という世界宗教単位の使用にも、検討の余地があろう。普遍的・超歴史的な宗教としての「仏教」なるものを想定し、その具体的現れとして個々の対象を分析することは、果たして妥当なのか。(例えば、本稿で紹介した Nattier の類型を用いれば、ケルアックの小説『ザ・ダルマ・バムズ』(=「輸入」型)とアメリカ創価学会(=「輸出」型)は共に「仏教」として一括りにされる。しかし果たして両者の間には、そのような「一括」を可能たらしめるような実質的な共通項が存在するのだろうか。そのように共通項を強引に捻り出すとき、研究者は無意識に「世界宗教仏教」の「普遍性」の擁護に加担してしまっているのではないか。)従って、「アメリカ」や「仏教」などの枠組みについても吟味する必要があるだろう。そしてその意味では、今後の「アメリカの仏教」研究の真の「発展」とは、「アメリカの仏教」という土俵自体の解体さえも伴うのかも知れない。

註

- (1) Association of Statisticians of American Religious Bodies (ASARB)が宗教団体の自己申告に基づいて作成した 2010 年の統計によれば、アメリカの仏教徒数は 991,683 人であり、これは同国の人口の約 0.3 パーセントにあたる。Association of Statisticians of American Religious Bodies, “The 2010 U.S. Religion Census,” <http://usreligioncensus.org> (accessed November 27, 2017.) 他方、Pew Research Center が電話によるアンケート（サンプル数「35,000 以上」）に基づいて作成した 2014 年の統計によれば、アメリカの成人（18 歳以上）人口のうち約 0.7 パーセントが仏教徒であるとされる。Pew Research Center, “America’s Changing Religious Landscape,” May 12, 2015, <http://www.pewforum.org/2015/05/12/americas-changing-religious-landscape/> (accessed November 27, 2017)
- (2) “American Buddhism”か“Buddhism in America”か、という議論については Richard Hughes Seager, *Buddhism in America*, New York, Columbia University Press, 1999, pp. 235-236; Rick Fields, “Divided Dharma: White Buddhists, Ethnic Buddhists, and Racism,” in *The Faces of Buddhism in America*, ed. by Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka, Berkeley, University of California Press, 1998, p. 200; Christopher S. Queen, “Introduction,” in *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, ed. by Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen, Richmond, Curzon Press, 1999, pp. xvi-xix.
- (3) Duncan Ryūken Williams, “Dissertations and Theses on American Buddhism,” in *American Buddhism: Methods and Findings*, pp. 262-266.
- (4) Emma McCloy Layman, *Buddhism in America*, Chicago, Nelson Hall, 1976; Charles S. Prebish, *American Buddhism*, North Scituate, Massachusetts, Duxbury Press, 1979; Rick Fields, *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*, 3rd rev. ed., Boston and London, Shambhala International, 1992.
- (5) Joseph B. Tamney, *American Society in the Buddhist Mirror*, New York, Garland, 1992; Charles S. Prebish, *Luminous Passage: The Practice and Study of Buddhism in America*, Berkeley, University of California Press, 1999; Seager, *op. cit.*
- (6) Charles S. Prebish, “Introduction,” in *The Faces of Buddhism in America*, p. 3.
- (7) Duncan Ryūken Williams, “Preface,” in *American Buddhism: Methods and Findings*, p. xii.
- (8) Prebish and Tanaka (eds.), *op. cit.*; Williams and Queen (eds.), *op. cit.*
- (9) Thomas A. Tweed, *The American Encounter with Buddhism 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent*, Chapel Hill and London, The University of North Carolina Press, 2000, p. xv.
- (10) こうした現状については、筆者が Duncan Ryūken Williams 教授（南カリフォルニア大学）にメールで問い合わせ、ご教示頂いた。
- (11) この二分法（「two Buddhisms」論）については、Reid J. Leamster, “A Research Note on English-Speaking Buddhists in the United States,” in *Journal for the Scientific Study of Religion*, vol. 51 (1), 2012, pp. 144-145 にサーベイがある。また、この二分法への批判につい

- ては、Scott Mitchell, *Buddhism in America: Global Religion, Local Contexts*, London, Bloomsbury Academic, 2016, pp. 208-9 を参照。
- (12) Jan Nattier, “Who Is a Buddhist?: Charting the Landscape of Buddhist America,” in *The Faces of Buddhism in America*, pp. 189-190.
- (13) Seager, *op. cit.*, pp. 9-10.
- (14) Tweed, *op. cit.*, p. xvi. その例として Tweed が挙げているのは、Penny Van Esterik, *Taking Refuge: Lao Buddhists in North America*, Tempe-Toronto, Arizona State University-York University, 1992; Paul David Numrich, *Old Wisdom in the New World: Americanization in Two Immigrant Theravada Buddhist Temples*, Knoxville, University of Tennessee Press, 1996; Janet McLellan, *Many Petals of the Lotus: Asian Buddhist Communities in Toronto*, Toronto, University of Toronto Press, 1999; Phillip Hammond and David Machacek, *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion*, New York, Oxford University Press, 1999.
- (15) Numrich, *op. cit.*, p. 64.
- (16) *Ibid.*, p. 65.
- (17) Senryō Asai and Duncan Ryūken Williams, “Japanese American Zen Temples: Cultural Identities and Economics,” in *American Buddhism: Methods and Findings*, p. 30.
- (18) *Ibid.*, p. 29.
- (19) フィリップ・ハモンド, デヴィッド・マハチェク (栗原淑江訳) 『アメリカの創価学会——適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊國屋書店, 2000 年, 131 頁。
- (20) 同書, 133 頁。
- (21) 同書, 132 頁。
- (22) Numrich, *op. cit.*, p. 140.
- (23) Seager, *op. cit.*, pp. 216-231.
- (24) なおあくまで傾向だが, 個別集団研究の担い手には, そのエスニック集団の出身の研究者が多い。日系の仏教集団の研究にもこの傾向は表れており, 日系アメリカ人もしくは日本人の研究者による研究が突出して多い。例えば, Kenneth K. Tanaka, “Issues of Ethnicity in the Buddhist Churches of America,” in *American Buddhism: Methods and Findings*, pp. 3-19; 常光浩然『北米仏教史話——日本仏教の東漸』仏教伝道協会, 1973 年; 中野毅「ハワイ日系教団の形成と変容——本派本願寺教団と日系コミュニティ」、『宗教研究』第 55 巻第 1 号, 1981 年, 45 - 72 頁; 本多千恵「キリスト教社会における日本宗教の布教ストラテジーと適応——第二次世界大戦前のハワイ社会における浄土真宗本派本願寺教団の事例をめぐって」、『年報社会学論集』第 7 号, 1994 年, 73 - 84 頁; 守屋友江『アメリカ仏教の誕生——二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』現代史料出版, 2001 年; 島田法子「20 世紀初頭のハワイにおける仏教開教と文化変容——『同胞』にみられるアイデンティティの変化を中心に」, 戸上宗賢編『交錯する国家・民族・宗教——移民の社会適応』不二出版, 2001 年, 179 - 211 頁。
- (25) 仏教学者たちは, アメリカにおける仏教の表象に限らず, 広く西洋における仏教の表象をも研究してきた。(サイドから受けた影響の大きさは様々だが) そのような研究の事例として,

- Philip C. Almond, *The British Discovery of Buddhism*, Cambridge, Cambridge University Press, 1988; Donald S. Lopez, Jr. (eds.), *Curators of the Buddha: The Study of Buddhism under Colonialism*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1995; Galen Amstutz, *Interpreting Amida: History and Orientalism in the Study of Pure Land Buddhism*, New York, State University of New York Press, 1997; Robert H. Sharf, "Buddhist Modernism and the Rhetoric of Meditative Experience," in *Numen*, vol. 42 (3), 1995, pp. 228-283.
- (26) Ellen Goldberg, "The Re-Orienting of Buddhism in North America," in *Method & Theory in the Study of Religion*, vol. 11 (4), 1999, pp. 340-356.
- (27) *Ibid.*, p. 347.
- (28) David L. McMahan, "Modernity and the Early Discourse of Scientific Buddhism," in *Journal of the American Academy of Religion*, vol. 72 (4), 2004, pp. 897-933.
- (29) Tweed, *op. cit.*, p. xvi.
- (30) Arthur Versluis, *American Transcendentalism and Asian Religions*, New York, Oxford University Press, 1993; Martin Verhoeven, "Americanizing the Buddha: Paul Carus and the Transformation of Asian Thought," in *Faces of Buddhism in America*, pp. 207-227; Harold Henderson, *Catalyst for Controversy: Paul Carus of Open Court*, Carbondale, Southern Illinois University Press, 1993; Stephen Prothero, *The White Buddhist: The Asian Odyssey of Henry Steel Olcott*, Bloomington, Indiana University Press, 1996; Richard Hughes Seager, *The World's Parliament of Religions: The East-West Encounter*, Bloomington, Indiana University Press, 1995.
- (31) John Kabat-Zinn, *Wherever You Go, There You Are*, New York, Hyperion, 1994, p. 4.
- (32) Jessie Sun, "Mindfulness in Context: A Historical Discourse Analysis," in *Contemporary Buddhism*, vol. 15 (2), 2014, p. 400.
- (33) J. Mark G. Williams and Jon Kabat-Zinn, "Mindfulness: Diverse Perspectives on Its Meaning, Origins, and Multiple Applications at the Intersection of Science and Dharma," in *Contemporary Buddhism*, vol. 12 (1), 2011, pp. 2-3.
- (34) こうした研究動向については、Jessie Sun による簡潔なサーベイがある。Sun, *op. cit.*, p. 405.
- (35) 例えば、Tim Ryan, *A Mindful Nation: How a Simple Practice Can Help Us Reduce Stress, Improve Performance, and Recapture the American Spirit*, Carlsbad, Hay House, 2012; Barry Boyce (ed.), *The Mindfulness Revolution: Leading Psychologists, Scientists, Artists, and Meditation Teachers on the Power of Mindfulness in Daily Life*, Boston, Shambhala Publications, 2011.
- (36) Geoff Dawson and Liz Turnbull, "Is Mindfulness the New Opiate of the Masses? Critical Reflections from a Buddhist Perspective," in *Psychotherapy in Australia*, vol. 12 (4), 2006, pp. 61-2.
- (37) Miles Neale, "On McMindfulness and Frozen Yoga," in *Embodied Philosophy*, June 30, 2016. <http://www.fivetattvas.com/blog/mcmindfulness-frozen-yoga> (accessed November 27,

2017)

- (38) Rupert Gettin, “On Some Definitions of Mindfulness,” in *Contemporary Buddhism*, vol. 12 (1), 2011, p. 274.
- (39) *Ibid.*, p. 268.
- (40) 例えば, Georges Dreyfus, “Is Mindfulness Present-Centred and Non-Judgmental? A Discussion of the Cognitive Dimensions of Mindfulness,” in *Contemporary Buddhism*, vol. 12 (1), 2011, pp. 41-54; Ron Purser and David Roy, “Beyond McMindfulness,” in *Huffpost*, July 1, 2013, updated August 31, 2013. https://www.huffingtonpost.com/ron-purser/beyond-mcmindfulness_b_3519289.html (accessed November 27, 2017)
- (41) Williams and Kabat-Zinn, *op. cit.*, p. 5.
- (42) ケネス・田中（堀内俊郎訳）「アメリカに浸透する仏教——その現状と意義」, 『国際哲学研究』第2号, 2013年, 29 - 32頁。